潜入ルポ

2023年6月10日
おはなし会ひみつの本箱 今年度第1回 大人のためのおはなし会

みなさん、こんにちは！ルポ隊員のアランTです。

ひみつの本箱 さんが開催する **2023年第一回大人のためのおはなし会**が6月10日土曜日にサマミッシュ校カフェテリアで開催されました。今回のテーマは「本選びのポイント」についてです。子を持つ親として無視できない重要なテーマに広報部のメンバーとともに興味津々で参加してきたので報告します。

ひみつの本箱さんの活動についてざっと説明させていただきます。ひみつの本箱さんは補習校のボランティア・グループであり、幼稚園と小学校で朝読書の時間にクラスを訪問し、10分間のおはなし会を行っています。その他に年末に開催を予定しているかるた大会や、大人のためのおはなし会も不定期に開催されています。現在のメンバーは21名で今年は5名の増員があったそうです。

今回は、大人のためのおはなし会の今年度第一回目の開催です。コロナ禍では活動が制限されていたため、久しぶりの対面での開催となりました。そして、今回のテーマは「本選びのポイント」です。これは、親ならば一度は悩んだことがある内容であり、補習校に通っていても、日本語に触れる機会があっても、本を選ぶことは簡単ではありません。

このおはなし会は、日本語を楽しく継続して学習し、本と仲良くつきあっていくために、どうしたらいいのかについて情報交換する場として開催されているのです。まずはおはなし会のメンバーのみなさんが、各自おすすめの本を紹介してくれました。以下に各メンバーの方々のおすすめの本とそれぞれの理由を抜粋して報告します。

もりのホテル
ふくざわゆみこ（著）
出版社：学研プラス

子育て3年目に年齢に適した本選びに行き詰まってしまいました。そこで、本選びのポイントとして考えたのは、シリーズ展開しているかどうかや同じ作者が複数の本を書いているか、そして背景や表情が豊かに描かれているかどうかということです。

ふくざわゆみこさんは、10冊以上の本を出版しており、絵にも温かみが感じられます。特に息子は鳥が好きで、その中でもこの本が大好きです。内容はあらいぐまが様々な動物に合った部屋を紹介していくというお話です。息子は特にお気に入りのページがあり、毎晩2年間もどの鳥さんになりたいかを話しています。絵を見るだけで楽しい気持ちになり、ふくざわさんの本を手当たり次第に借りています。

もぐらバス
佐藤 雅彦 (著), うちの ますみ (著)
出版社：偕成社

人間の暮らす地面の下で過ごす生き物たちがバスにのっていたら、たけのこがでてきて、バスが止まってしまいます。それを掘り起こして、というお話。アメリカではたけのこは見当たらないので、娘と「たけのこってこういうふうに大きくなるんだよ」という話ができるきっかけになっています。そしてこの本を読むと、たけのこごはんや青椒肉絲が食べたくなります。本を読んで、たけのこを子供と一緒に食べるというのが日課でした。

子供が生まれたときに、本がほしいと言ったんです。友人がこの本を贈ってくれて、裏表紙にサインをしてくれました。その思い出がある本なのです。子供がどれだけ食いついてくれるか、それを考えながら本は選んでいます。

はちうえはぼくにまかせて
ジーン・ジオン (著), マーガレット・ブロイ・グレアム (イラスト), 森 比左志 (翻訳)
出版社 ： ペンギン社

このお話は、はちうえを預かって世話するアルバイトのお話です。特に好きな点は、絵が美しい緑色、黄色、青色で統一されていることです。

物語は、近所の人々の鉢植えを持ち帰り、両親に「僕は鉢植えのアルバイトをするんだ」と伝えるところから始まります。しかし、徐々に彼は鉢植えに夢中になっていきます。男の子は自分のやりたいことを追求し続けます。黙々と好きなことに取り組む姿勢が描かれています。お母さんは黙々と料理を作り続け、お父さんは黙々と不満を抱え続けます。

このシュールでカオスな表情が素晴らしく表現されています。家は次第にジャングルのようになり、最終的にはお風呂まで植物で埋まってしまいます。そして夢の中で、家が植物だらけになり壊れていく様子を見ます。彼は自ら図書館に行ってせんていを学び、成長していきます。お父さんの怒りも次第に変化し、息子が持ち主に鉢植えを返したあとは寂しさを感じる結末となります。

このお話は子供の自立心を描いた、ふわっとした雰囲気の物語です。私自身が好きで母に買ってもらった本であり、それを息子に読み聞かせることで自分の思い出に浸ることができます。また、物語の持続性も魅力的であり、息子と共に読み続けることができるのも好きです。

おちんちんのえほん
やまもと なおひで (著), さとう まきこ (イラスト)
出版社 ： ポプラ社

ちいさい男の子が大好きなことば。我が家の息子もこの言葉を楽しそうに口にしていたので、いい機会だと思い性教育の本を取り寄せました。

この本はすべてひらがなで書かれており、温かくかわいらしい絵も描かれています。言葉もやさしく、大人が読み聞かせるのに適した柔らかい表現が使われています。子供が初めて触れる「人間と性」の本としてお勧めの一冊です。

ルルとララのカップケーキ
あんびる やすこ (著, イラスト)
出版社 ： 岩崎書店

小学生の二人の女の子、ルルとララが小さなお菓子屋さんを開くことにしました。開店は土曜日で補習校を思わせ、親しみを感じさせます。彼女たちは次々と素敵なお菓子を作ります。支払いはお金ではなく、ハチミツやスミレの桜漬けなど、とてもかわいらしいアイテムで行います。補習校の図書室にも置いてありますので、ぜひご覧ください。

つるばら村の三日月屋さん
茂市 久美子 (著), 中村 悦子 (イラスト)
出版社 ： 講談社

このシリーズは、すでに10巻まで出版されています。物語は「つるバラ村」に住むくるみさんがパン屋を開店し、さまざまな動物たちが買い物に訪れるという内容です。くるみさんはお客さんのリクエストに応じて様々な種類のパンを焼きます。そして、お客さんたちにもそれぞれの事情があります。結婚式やお祝い事、病気など、さまざまな理由でパンが必要なのです。くるみさんは心を込めてパンを作り、お客さんたちの要望に応えるというお話です。

絵本は絵を見て楽しむということも素晴らしいのですが、この作品を選んだ理由は、絵がほとんどない分、聞くことによって子供達が想像力を働かせることができる良い作品だと思ったからです。夜寝る前に枕元で読み聞かせをしていました。どんな動物が買いに来るのか、次はどんなパンを焼くのかということを想像しながら眠りにつき、子供達が楽しい夢が見られると良いなという思いでした。当時、子供たちは小学2年生か3年生で、もっと読んでほしいとせがまれることがありました。現在は中学1年生なので、そのような要求はありませんが、振り返ると、読み聞かせをしていたことは私の思い出として残っています。

絵本を楽しむだけでなく、親の声で読み聞かせをして一緒に物語の世界を楽しむことも素敵だと思います。

エルマーの冒険シリーズ
ルース・スタイルス・ガネット (著), ルース・クリスマン・ガネット (イラスト), わたなべ しげお (翻訳),
出版社 ： 福音館書店

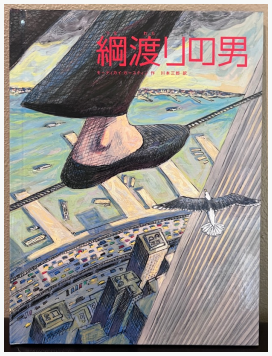
龍が大好きな息子のお気に入りシリーズです。絵はほとんどありませんが、私が読み聞かせています。物語は、勇気ある9歳の男の子が龍を救うという内容です。この男の子は礼儀正しく、勇敢で知恵もあります。しかし、彼は困難に立ち向かうために一人で奮闘しなければなりません。そんな姿勢が、子供たちにとっても素晴らしいロールモデルになるのではないかと思います。

つみきのいえ
平田 研也 (著), 加藤 久仁生 (イラスト)
出版社 ： 白泉社

さまざまな本を見ていると、私は一瞬のうちに惹かれる傾向があります。この本は美しい絵と、優しい色使いが特徴で、手に取ってみたいと思いました。すべてひらがなで書かれているため、ひらがなが読める子供たちなら読むことができます。しかし、内容を読み進めていくと深い部分に触れ、むしろ大人が考えさせられる要素が含まれています。

この本は、ひとりのおじいさんの人生が描かれています。そして、環境問題もテーマとして絡んできます。物語の舞台は、海面上昇によって徐々に水没していく村です。おじいさんはその村に住んでおり、水位が上がるたびに家を重ねて建てて生活しています。彼の家は海に浮かぶように積み上げられ、多くの人々が村を去っていく中でも、おじいさんは自分の人生を過ごした家を愛おしく思い続け、家族がいなくなっても、子供たちが家を出ていっても、自分はずっとそこに住み続けるという決意を持ってすみ続けます。

この物語は、人生のあり方だけでなく、環境問題など、さまざまな側面から考えさせられる要素がたくさんあります。絵は優しく、心に響くものです。内容も絵も私が大好きな一冊なので、ぜひおすすめしたいと思いました。



綱渡りの男
モーディカイ・ガースティン（著）, Mordicai Gerstein（原名）, 川本 三郎（翻訳）
出版社 ： 小峰書店

この絵本は、情感に満ちた絵が特徴です。主人公は大道芸人のフィリップで、冒険心に溢れる男性です。彼は高い建物を見ると綱渡りをしたいという思いに駆られます。フィリップは許可が下りないことを理解していますが、ある日、昼間に忍び込んで準備し、朝日が昇る頃に綱渡りを始めます。本の中には見開きごとに美しい絵がたくさんあります。

やがて通勤途中の人々に見つかり大騒ぎとなり、最終的には警察に逮捕されます。この絵本は、実際に50年前に起こった実話を基にしています。これが物語の本編です。

しかし、物語の前後には重要なエピソードがあり、本編がそれらに挟まれています。最初のページでは、2つのツインタワーが描かれており、かつてニューヨークで最も高いビルだったことが説明されます。そして最後のページでもう一度タワーの絵がぼんやりと現れ、2つのタワーは現在存在しないものの、フィリップの行動は人々の記憶に残っていることが示されます。本編はこの2つの扉絵の間に配置されていますが、あえて2001年の出来事には触れられていません。

小さな子供たちは911のことを知らないかもしれませんが、綱渡りの話だけでも楽しめると思います。一方で、事件について知っている大人たちには心に響く要素があります。この絵本には辛いことや苦難が具体的に描かれているわけではありませんが、2つのタワーが以前にどれほど活気に満ちていたかが表現されており、日本語が苦手になってきた高校生でも楽しめる素晴らしい一冊です。絵も内容も見事な切り口で描かれています。

本稿で紹介した本の詳細は書店のサイトを検索してご覧ください。

おおきな木
シェル・シルヴァスタイン（著），村上 春樹（翻訳）
出版社 ： あすなろ書房

有名な本なので、内容ではなく、使い方について紹介したいと思います。現地校で日本語の本の読み聞かせをしています。困ったのが、日本語を読めるレベルと物語として理解するレベルが違うということです。

これは絵本を卒業した後によく起こることであり、子供たちは絵本を楽しむ年齢を超えていますが、まだ日本語の読解力が完全には身についていないのです。このような差をどのように埋めていくかが、私たちが直面する問題です。そこで、この本がその問題の解決策となるきっかけになると考えています。

元々は英語の本であり、訳者として本田錦一郎と村上春樹の二人が関わっています。訳者によって受け取り方が異なるため、両方のバージョンを読み比べることも楽しいと思います。また、この本は1ページごとの文字数が少ない特徴があります。そのため、この本は行間を読む本と言えます。一年生が感じる行間、六年生が感じる行間、大人が読んだ時に感じる行間は、年齢によって異なるでしょう。したがって、読解レベルがまだ完全に身についていなくても、それぞれの年齢に応じて、その行間を感じ取ることができるのではないかと思っています。

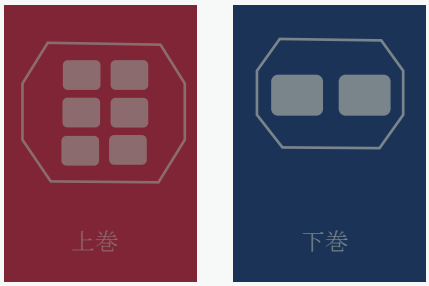
皆さんのおすすめ本の紹介は、自分自身の経験に基づいた視点で行われ、書評やネットのレビューとは異なる本当の意見を聞くことができました。そのため、大変参考になりました。

やはり、おはなし会のメンバーたちも本選びに悩んでいることがわかりました。特に多くの方が共有されたポイントは、絵が美しく感情を揺さぶること、そして自分自身（親）が好きな本であることでした。自分が好きな本を子供たちに勧めるということは、なんとなく記者が本業の営業の仕事をしている感じと似ているなと思いました。

その後、図書室の紅谷先生から、今回のテーマである本選びについてのお話をいただきました。紅谷先生は大学時代に児童文学を専攻された方であり、子供の本に関するプロフェッショナルですね。先生のお話は次のページで。

図書室の紅谷先生によると、子供の本の選び方は奥が深く、簡単には行えないとのことです。

先生は、瀬田貞二さんという著者が書いた子供に対する本の選び方についての書籍を紹介してくださいました。以下はその抜粋です。



注：表紙の写真はイメージです

児童文学論　瀬田貞二子どもの本評論集
（上・下巻）
瀬田 貞二（著）
出版社 ：福音館書店

「子供同士の個人差はかなり大きいが、およそ成長する段階には、固有な感じ方考え方の共通性があり、そこにかなった、その興味に訴える文学が必要になる。

3．4．5歳の幼稚園児は、好奇心のかたまりでお話を聞きたい盛りである。絵本が好きで、自分の知っている身辺のものでてくるものをよろこぶ。単純な話から、簡潔な昔ばなしまでを繰り返して聞く。リズムと動き、繰り返しと展開を楽しむ。

6，7歳の小学下級のころは、一度に生活経験が増えて、関心も広がる。注意力も出てくるから、かなり長い物語も聞ける。主題の明確な昔話のほとんどがこの時期の好物だ。

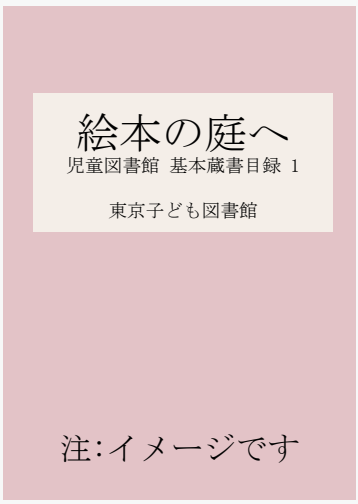
8，9歳の小学中級を私は文学教育の峠だと思う。集団に慣れ、知識が著しく増す。自意識のめざめ、客観性が出る。男女が別れだして、万事に積極的になる。＜中略＞よく読もうとするのがこの時代で、伸びる意欲が人間を突き上げるのもこの時代だ。わかりやすい小説へどんどんとびつく。

小学校5，6年と中学1年で思春期へ一歩をかける。子供の殻から抜け出したがり、一種の反抗さえ起こす。知識も観察も見について、物語が食い足りなくなり、小説のすこし手の込んだものを読み漁る。伝記、冒険小説、歴史もの、探偵・科学小説に広がる。いわゆる名作ものがこの頃に一番ふさわしい。

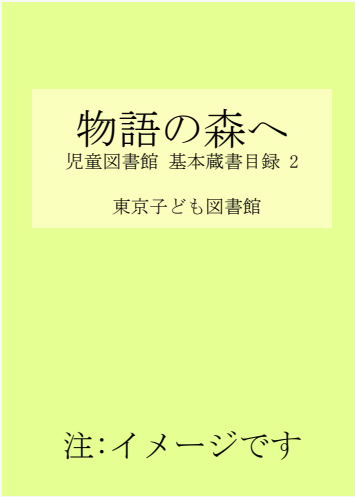
中学2，3年は過渡期だ。こどもの文学遍歴の総仕上げで、やさしい大人の小説にも手を広げる。」　（上巻　80―81ページ「発達の段階に応じて」 より抜粋）

この本は厚みもあり、読むと少々大変そうな印象がありますが、実際に子供にどんな本を与えたいのかを知りたい方には役立つ情報が含まれているようです。

もしもっと読みやすい情報を求めている場合は、「絵本の庭へ」と「物語の森へ」という本があります。これらの本には、さまざまな本の内容の概要や、どんな話なのか、どの学年に向いているかなどの情報が記載されています。これらの本は図書室の一番奥にある大人の本のコーナーに置かれていますので、参考にしていただければとのことでした。



絵本の庭へ（児童図書館 基本蔵書目録 1）（児童図書館基本蔵書目録 1）
東京子ども図書館（編集）
出版社 ： 東京子ども図書館



物語の森へ（児童図書館 基本蔵書目録 2）（児童図書館基本蔵書目録 2）
東京子ども図書館（編集）
出版社 ： 東京子ども図書館

図書室にあります！

以下に先生がおっしゃった内容をまとめました。（＊記者が編集しています）

- 自分の子供が好きな話のジャンルを知ることが大切であり、その興味に基づいて本を選ぶことが重要です。
- お父さんやお母さんは子供のことを一番よく知っています。子供が好きなものを見極め、その分野の本を選ぶことが重要です。例えば、子供が昆虫が好きなら、昆虫の話から始めることで想像力が発達し、新たな発見が生まれることもあります。
- 多くの本を選んで読んでもらうことが重要です。自分が読んで好きだと思った本を子供に読んであげることは、種をまくことと同じくらい大切です。種をまいておけば、いつ芽が出るかわからないのと同じように、子供の頭の中で育つことがあります。
- 名作でなくても構いません。子供の想像力が広がることが重要です。本を読むことは、相手の気持ちになり、想像力を通じて新たな世界を広げることです。発見や発明も想像力があるから生まれるものだと考えられます。
- 夏休みには最大で10冊の本を貸し出すことができます。まずは自分（親）が興味を持つ本を選んで読んでみてください。自分が面白くない本は避けましょう。
- 「綱渡りの男」という本もあります。この本は9/11については書かれていませんが、読むとなぜそうなったのかについて考えさせられます。子供も大人も同じように感じることができます。
- 子供のために頑張ってください。図書室でいつでも質問に答えることができます。本を紹介することもできますので、積極的に利用してください。

さて、大人のためのおはなし会への潜入ルポは、大成功だったのかどうかはわかりませんが、（正体バレバレでした）メンバーの皆さんや紅谷先生から非常に参考になる情報やアドバイスをたくさんいただきました。記者自身も、取材ノートにメモを入れることを忘れてすっかり聞き入ってしまいました。。

大人のためのおはなし会は不定期に開催されるとのことです。次回はぜひ、今回参加できなかった皆さんもご参加いただけたらと思います。さらなる貴重な情報や交流を得ることができると思いますよ！

江村代表独占インタビュー (1/4)

EXCLUSIVE

主な活動について

– 普段の活動としてはどのようなことをされていますか？

はい、私たちは幼稚園と小学生のクラスを訪問して読み語りを行っています。

– 読み聞かせではなく、「読み語り」なんですね？

そうです、私たちはあえて読み聞かせではなく、読み語りという言葉を使用しています。読み聞かせというと、読み手から聞き手への一方的な関係を連想させるかもしれませんが、読み語りとは一緒になって物語の世界を共感することを意味しています。とはいえ、大きなこだわりはなく、メンバーの使いやすい方を使っています。

– 小学生は1年生から6年生までですか？

主に対象としているのは幼稚園と1年生から2年生の子供たちですが、6年生まで訪問しています。子供たちが大きくなっても本の世界を楽しんでほしいという思いがありますので、6年生にも読み語りを行っています。6月17日には6年生、6月23日は5年生の各クラスでおはなし会を行います。

– 高学年の読み語りは低学年に比べて難しいですか？

高学年になると、読み語りは子供っぽいと思われるかもしれませんが、実際に試してみると意外に好評であり、高学年の子供たちが意外にも感受性豊かに受け入れてくれることがあります。彼らが聞いて感じたことを日常生活に活かしてくれればと思っています。

– 読み語りで読む本はどのように選んでいますか？

まず、子供たちにとって面白いと思える本を選びます。名作はもちろんですが、この年齢の子供たちがどの本に興味を持つか、という点についてメンバーと話し合いながら選定しています。また、メンバーからも「この本をこの学年で読んでみたい」という提案が出ることもあります。さらに、おすすめの本のリストも参考にしています。物語性があり、少し奥深い本を選ぶようにしています。考えさせられるような話が好まれます。

江村代表独占インタビュー (2/4)

– ひみつの本箱はいつから活動されているのですか？

2003年の11月に活動を開始しています。

– 組織的にはPTAの一部ですか？

いいえ、私たちは独立したボランティアの組織ですが、予算はPTAから提供していただいています。自主的に集まっているグループですが、学校も私たちの活動を教育の一環として快く受け入れてくれています。

– 活動していて苦労されていることは？

以前はメンバーが少ない時期がありました。そのような場合、読み手が集まらず、おはなし会の機会が減ってしまうことがありました。メンバーの増減には波があります。過去には8人の時期もありました。現在は21名おり、1日に2学年で同時に行うこともあります。

– やっていてよかったと思う瞬間は？

子供たちの目に宿る輝きですね。実際に本を読んでいるとき、子供たちが私たちを見てくれる姿は、とてもやりがいを感じます。また、保護者から、読んでもらった本が子供たちにとって面白いという言葉を伝えられることもあります。そうした瞬間はとても嬉しいです。

- PTAや学校に要望はありますか？

いいえ、特にありません。私もPTAの委員会で発表させていただいていることに感謝していますし、本の選定においては紅谷先生も協力してくださるので、ありがたいです。またおはなし会を行う際に日程の調整をしてくださったり、おはなし会当日は、開始時に先生から紹介していただいたりすることに感謝しています。

江村代表独占インタビュー (3/4)

カルタ大会について

– カルタ大会はいつごろ開催する予定ですか？

カルタ大会は12月に開催させていただきたいと考えています。ただし、万が一感染が広がってしまうような事態が起きた場合を除いてのことです。開催したいという意欲はあります。

– どんなカルタを使うのですか？

使用するカルタには、ポケモンやドラえもん、百人一首などがあります。各グループには1つのカルタを配置し、子供たちにどのカルタを使いたいか選んでもらいます。

– グループごとに分けるのですね？

はい、まず、参加者を学年ごとに分けます。幼稚園児は幼稚園グループ、1年生は1年生グループといったように、学年ごとに複数のグループを編成します。各グループには敷物を敷き、それぞれのグループに一つずつカルタを置きます。参加者の数に差が生じることもあるため、適切な人数調整を行い、均等に開始します。

– 誰が参加できるのですか？

カルタ大会への参加は、幼稚園児と小学生がプレーヤーとして参加することができます。また、親は審判として参加できます。さらに、中高生はカルタの札を読む役割を担当しています。中高生は幼稚園児と小学生の低学年と同じお昼休みの時間帯なので、協力いただいています。

– 参加には予約が必要ですか？

参加するためには、親御さんはボランティアとして参加を募集していますが、子供たちは予約なしで参加することができます。

江村代表独占インタビュー (4/4)

さいごに

– 本が嫌いな子供に対しては、どのように対応すればよいでしょうか？

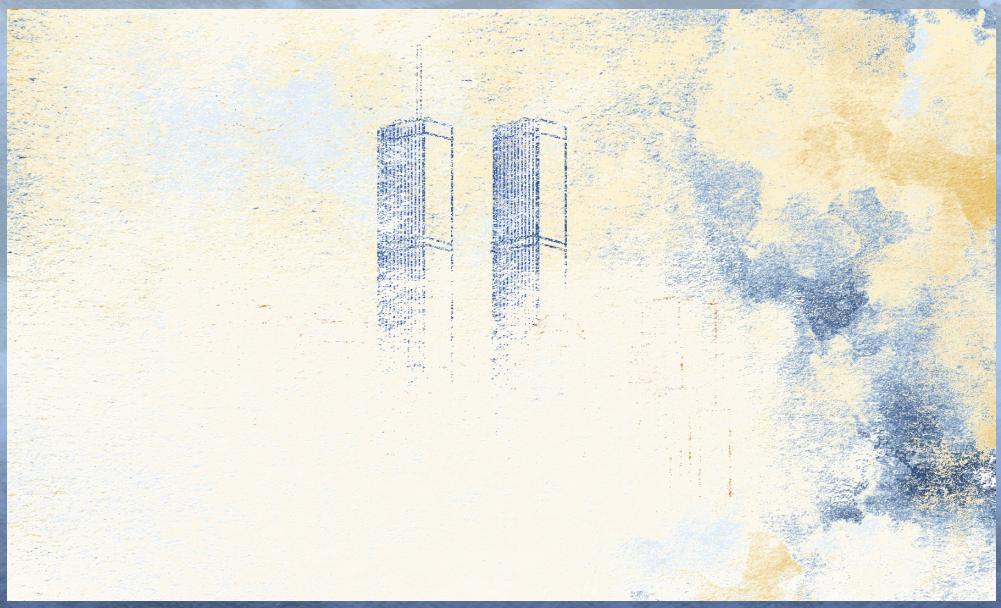
無理に進める必要はありませんが、子供の興味があることを掘り下げることが重要です。学年よりも低いレベルの本でも構いませんし、親が面白いと思う本を持ってくることもできます。ただし、本を読むことよりも親子の絆を大切にすることが重要だと考えていますので、無理に引っ張ってきて読ませる必要はありません。本日の発表にもありましたが、興味のある本から世界を広げていくのはいかがでしょうか。

ー　さいごに、保護者へのメッセージなどあればお願いします。

私達は、補習校の貴重な授業時間の一部を使わせていただき、大切なお子様と本の世界を共有させていただくことを嬉しく思っています。PTA の皆様にはご理解とご協力いただきありがとうございます。これからもよろしくお願いいたします。

ー　ありがとうございました。

記者も江村さんと一緒に写真を撮らせていただきました



このページのイラスト: Alan Takatsu

編集: 広報部